

『物質と記憶』における心の広がり

永野 拓也

○ 問題設定

ベルクソンの第二著作『物質と記憶』は、知覚は脳の中にあるのも、外界から隔絶した精神の中にあるのでもなく、それが知覚されるところ、つまり外界にあるのだ、と主張したことで名高いだろう。この主張は、言語は思考と同一ではなくその補助具である、思考は脳に局在化されない、といった結論にいたる幾つかの批判的な考察に支えられている。このように列挙すると、『物質と記憶』には近年の「行動的外在主義」¹と結びわめて近い主張が含まれるように思われる。両者の違いは、ベルクソンが記憶内容 (souvenir) を非空間的なものとして理解する点だろう。

本稿の狙いは、ベルクソンの記憶についての論述を、できるだけ「精神は非物質的である」という予断を持ち込まずに、読み解いてみることにある。そして、記憶についての結論が、どのように知覚や言語の理論に影響するかを見定めるこ

とである。結果として、記憶内容の空間性を否定する代わりに、認知の外界への「拡張」と、記憶内容をより深く捉えようとする意識の「拡張」あるいは「膨張」とを重ねてゆこうとする、『物質と記憶』の構図を取り出すことができらばと思う。²

一 脳局在論を通じて批判される立場

ベルクソンが批判する局在論は、知覚や記憶といった認知の諸機能が、それぞれの統一性と相互の区別を維持したままで、脳皮質の各所に位置づけられるとする仮説である。言い換えると諸機能は、それと単線的に対応する、脳の特定部位を持つ。さらに、これらの部位は、ニューロンによって互いに「連合」することにより、複雑な心の働きを作り出すとみなされる。局在論は、ブロカに始まって、『物質と記憶』の当時まで支配的であり、この仮説に異論を唱えるというベル

1 『物質と記憶』における心の広がり

クソンの態度は、フランス国内では狂気の沙汰とみなされるまでに異例であったという。

結果から言えば、上のような意味での局在論は現代では否定されている。今日までに、神経組織の大部分が、単線的に接続しつつ、機能を特定部位で担うのではなく、複線的に連接する単位によって、機能を分散させて担うこと、また後者のような神経の接続により、単線的な局在では説明できない認知の機能を説明できることが分かっている。このことを根拠として、ニューロン群の興奮パターンとその変形に、認知と、認知過程に現れる心的表象を対応させ、こうした表象を「分散表象」と呼ぶ現代の立場が、コネクシヨニズムである。

しかしベルクソンはといえば、局在論を批判するにあたり、神経系の組織そのものについて、局在論の代替案を提示するわけではない。また、コネクシヨニズムは、認知を担う神経組織をひとまとめとはせずに、分散させるといふ点で、上のような古い局在論と、表面的には区別されるが、この相違にはしかし、もう少し奥行きがあると思われる。そこで、局在論とそれに対するベルクソンの批判の射程を理解するために、認知をめぐる現代の対立を、参考までに少し見ておこう。

思考を導くものうちであいまいなところがなく、また多産にみえるのは、単語とその構成規則（そして規則の再帰的適用）から、いくらでも多様な文を作り出す言語であろう。

言語のこうした統語論的な構造を、認知にとつてもっとも基礎的な構造とみなすのが計算主義である。この立場に対して、認知の基礎的な構造は非統語論的だ（ニューロンの興奮パターンや結合の重みは単語や構成規則に対応しなくてもよい）とするのがコネクシヨニズムである。

ベルクソンの批判する局在論は、この二つの立場のどちらに近いだろうか。確かにベルクソンの扱う古い局在論は、記憶、知覚といった認知の機能、あるいは心的な表象を、統語論的な構造に還元しつくしはしない。しかしまた局在論は、人が思考するにあたって、組み合わせることのできる認知の因子の、本性や接続の仕方を明示したい立場にとつて価値がある。この立場を、論理的観点から洗練し徹底してゆけば、計算主義に行き着くように思われる。ベルクソン自身、講義の中で、「連合とわれわれが呼ぶ経験的な関係づけのうちには、すでに推論の模倣が含まれる」というライブニッツの指摘を深いものと評価している（C II 365）。

改めて確認しておこう。一般論として、思考の働きは、目の前に与えられているものを、それと異なるものと結びつけること、つまり何らかの「表象 (representation)」によって成り立つだろう。ヴォルムスの言うように、ここには、「相違 (différence)」と「一致 (convergence)」と(二つの側面がある。認知についての心理学的な理論は、「異なるもの」

の本性をめぐって、さまざまな姿をとるはずである。局在論を推進する心理学理論は、与えられているものと、これに結びつけられる多様なものを、同じ本性のものと考える。「同じ本性」とはどういうことか、あるいは、どうやって「一致」するのかを、あいまいではない形で説明するために、局在論があるといつてよい。例えば、知覚と記憶とは、同じく神経系のどこかに位置づけられ、かつ両者は位置を異にする、という具合に。同じ神経系内にある、という本性のせいで、両者の一致は物理作用として説明できさうである。知覚と記憶の質的な区別を避け、もつと記号化を推し進め、両者をそれぞれ言語的なモジュールにしてしまえば、思考が結びつけるものは互いにいつそう均質化し、一致の説明は明確になるだろう。

『物質と記憶』のベルクソンは、局在論が、まさに認知と言語との構造的な同型への期待をはらむことを指摘している。ベルクソンは局在論を導く認知観についてこう述べる。この認知観では、「なまの知覚・聴覚的イメージ・観念、という三つの項は、それぞれが異なった全体を形成し、それぞれが自足することになる」(266/136)のであるが、他方ではやはり「〔前略〕三つの項によって破られた連続を立て直さないといけなくなる。したがって、これら三つの項が延髄や皮質の別々な部分に宿っており、互いに連絡を保っている」中

略」といったことを仮定することになる」(267/136)。このような分解と結合は、「論証的知性 (intelligence discursive) の変わらない傾向」(270/139) に由来する。論証的知性は、動的な全体(進行 (progress))を、自足的で固定的な要素(事物 (choses))の合成とみなす傾向を持つ。こうしてこの傾向から産み出されるのが、認知の過程を「象徴によって表示しようとする逆らえない要求」(266/135)と、心理学における連合論である (269/139)。

ベルクソン自身が局在論を批判するのは、この批判を通じて連合論を論駁し、認知について自らの仮説を示すためである。実際、ヴォルムスが指摘するように、「物質と記憶」において、記憶をめぐる局在論の問題点は、認知についての心理学説の反証事例として取り上げられる。

この角度から、『物質と記憶』が局在論について指摘するジレンマを検討し、ベルクソンが表象を成り立たせる「相違」と「一致」についてどんな展望を持っているかを確認しよう。

二 記憶内容と意識の拡張・収縮

ジレンマの前半はこうである。記憶と知覚が脳の同じ場所にあるとすると、説明のつかない病理学的な事例がある。これによって記憶と知覚とを、脳の同じ場所に局在させること

が不可能となる。

まず、知覚や記憶は局在を受け入れるのだろうか。知覚についてベルクソンの考え方は明白である。「物質と記憶」第一章によれば、知覚とは、身体によって働きかけうるものまで縮減された、外界の諸運動だという。この縮減にとつて、感覚運動神経系はフィルターとして役立つ。したがって知覚は、脳を含む神経系を、欠くことのできない成立条件としてゐる。

また、記憶にも局在の可能な側面がある。というのは、「習慣のあらゆる性格を示す (225/84)」記憶があることをベルクソンは指摘するからである。つまり「身体が過去の活動を蓄積するのは運動装置として、かつ運動装置としてのみである」(223-224/81-82)と言われるように、ベルクソンは身体運動的な記憶を認めている。当然、この意味での記憶の局在はありうる。

では、身体運動的な記憶と、知覚とは、どのような関係にあるだろうか。ベルクソンは局在論のジレンマを述べる箇所、リボーとペインを参照しつつ、「一度成立した知覚が脳内に、記憶という状態でとどまるとすれば、それは知覚が動揺を与えた諸要素によって獲得された、態勢としてでなくてはならないように思われる」(270/140)と述べている。これは上記の、「身体は過去の活動を運動装置としてのみ蓄積す

る」という考え方と呼応する。身体的な記憶は、過去の知覚の身体的保存に他ならず、それならば知覚を可能にする身体の部位と同一の部位に保存されるはずである。

しかし、ある種の脳損傷によつて、関連する知覚は無傷であるのに、呼び起こされなくなる記憶があることを告げる病理学的な事例がある。ここから、脳損傷によつて呼び起こされなくなった記憶は、知覚の身体的保存としての記憶ではないことが分かる。当然、局在論的に言えば、知覚の身体的保存ではない記憶は、知覚を可能にする神経組織によつてではなく、いま損傷のある脳の部位を含む箇所に刻印されていたということになる。このように局在論は、損傷によるダメージの有無によつて示唆される、記憶と知覚の相違を、「場所の相違」と解釈し、かなりアドホックに記憶の場所を定めてゆく(267-268/136-137)。

ベルクソンが記憶の局在論を困難に追い込むのは、「場所によつて異なる一方のものが他方のものと同一になるのは、どういふ局在によつてなのか」という問いを発することによつてである。これがジレンマの後半である。この問いの根拠になるのが、再認という仕方での「表象」の場合、記憶内容が明晰になり、強度を増すにつれて、それとわかる段階を経ずに、記憶内容と知覚とが区別できなくなる、という心理学的観察である。

連合についての心理学が、どの点で局在論を求めるのかについて、ベルクソンはこう説明する。つまり、心理学としての連合論は「どれもどこかが現在の知覚に似た、無数にある記憶内容のうちから、どうやって選択が行われるのか」(303/182)を説明しきれない。そこで「しばしば心理学者たちはここで、生理学に責任転嫁して、脳内の過程を持ち出す」(C II 365)ということになる。つまり、記憶なり知覚なりが局在化され、記憶と知覚との連合は「連絡線やインパルスの動きとして物質化」(267/136)されるのだと。

したがって、局在論は最終的に、「なぜあれ〔あの記憶内容——補足筆者〕ではなくこれが、意識 (conscience) の光のもとに浮き上がってくるか」(303/182)を説明できるのでなくてはならない。ということは、局在論は、意識がとらえるがままの連合の様態を、説明できるのでなくてはなるまい。しかし、「最も初歩的な心理学的観察」(271/144)によると、記憶内容は、単に明晰になって強度を増すだけで知覚になってしまふことが分かる。ここで示されているのは、「記憶内容が想像的な要素から感覺的な要素へ移った」(271/144)ということである。局在によって説明できるのは、記憶の部位と知覚の部位に連絡がある、ということである。一つの部位に属するものが、別の部位に属するものと、同一になつてしまふことではない。同一になる、ということが、連絡線があ

る、ということだ、と強弁できるだろうか。しかし固定的な部位同士の連絡、というモデルは、ここで粘るには分が悪いように思われる。

以上からはまた、ベルクソンが「表象」の成立のために求める連合にとつて、何が必要かということも示されるだろう。ここまで明らかにしたのは、どこかが知覚に類似する無数の記憶内容は、神経系のうちに位置づけられることはないということ、さらにいえば、この記憶内容が現在の知覚との間で、ほぼ同化といつてもよいくらいの連合を示すのは、「あの記憶内容」、「この記憶内容」、「知覚」といった、互いに明白な外延を持つていそうな、概念的・言語的な項を予め想定し、これらの項同士の間に、「構成規則」のようなものを割り振ることによつてではない、ということである。

結果として、記憶内容は、明白な外延としての脳皮質上の部位から切り離されると同時に、明白な外延を持ちそうな項、という地位も失う。そしてその限りで、すでに互いに連合している状態を、最初から与えられるのである。つまり記憶内容は、すでに多をひとまとめにした「表象」とみなされるのである。この点をもう少し明確にしよう。表象的な記憶内容は、身体習慣的な記憶と対比される。たとえば「暗誦課題の記憶は、暗記される限りでは、習慣のあらゆる性格を示す」(225/84)。対して、「しかじかの特定の朗読の記憶、例えば

二度目の朗読とか、三度目の朗読とかいったものは、習慣の性格を全く備えていない」(226/84)。と云うことは、「しかじかの暗誦の記憶はひとつの表象であり、表象でしかない」(226/85)。習慣ではない、ということとは、記憶内容は繰り返しを含まないということである。この性格は、記憶内容の「総体」について指摘される。「特定の朗読の記憶にあつて、イメージは必然的に、一回で記憶力へ刻印されるのであり、というのも、他の朗読は、定義そのものからして、別の記憶を構成するからである。特定の朗読の記憶は、私の人生の一つの出来事なのである。つまり、こうした記憶は、その本質からして一つの日付を持ち、それゆえ反復されることがありえないのである。後の何度かの朗読がそこへ付け加えるであろうものは、この朗読の最初の本質を変質させるばかりである」(226/85)。この特徴ゆえに、現在の知覚と徹底して「異なる」因子が、再認においては提供されることになる。

だがもちろんこれだけでは、記憶が知覚へと連合し、一致して、知覚的な表象を形作ることの説明にはならない。記憶がすでに表象であるということは、次のような収斂の側面も意味する。「この記憶は、精神の一つの直観 (intuition) の内に与えられ、この直観について、私は好きなように、伸ばしたり縮めたりできる。私はこの記憶に、任意の持続 (duree) が備わることにするのである。私がこの記憶を一挙に、一枚

の絵の中にあるように、包括的に捉えることを妨げるものは何もない」(226/85)。つまり、内部に徹底した相互の差異を抱える記憶内容総体は、一定の伸縮を要するのであり、とりわけ収縮の側面に、記憶と知覚との一致が委ねられる。

記憶内容の全体としての伸縮にとって不可欠なものともみなされるのが、意識の「膨張 (dilatation)」である。「知覚が記憶内容呼び起こすのは、わたしたちの意識が全体として膨張することによってであり、意識はこのときもつとも大きな表面へと広がることによって、その豊かさについて、詳しい調査をいっそう先まで進めることができる」(305/184)。意識は自らを広げたり (elargir) (拡張 (extension)) 引き締めたり (resserrer) (収縮 (contraction)) する (305/185) のである。意識と関わる限り、記憶内容の総体は、それなりの連合を示す。「私たちの記憶内容は、記憶力が引き締まるほど、ますますどこにでもあるような (つまり類似が可能な——筆者補足) 形をとり、記憶力が膨張するほど、ますます人格的な (つまり比類のない——筆者補足) 形をとる」(308/188)。ここで記憶力 (memoire) と呼ばれているのは意識に他ならない。記憶内容総体が、意識の行うこの限局的働きに應える本性を持つことは、既に見たとおりである (226/85)。こうして、「表象」を成立させる連合は、意識の拡張・収縮による、記憶内容の総体の伸縮によって説明される。

さらに言わねばならないが、この拡張と収縮の働きは、多層的に、不連続に展開する。ベルクソン自身の比喩によれば、意識は知覚から記憶内容総体へ、そこからまた知覚へ、という「回路 (circuit)」（249/114）をなして記憶内容を探索するのである。この回路が複数ある、ということが、さまざまな連合がある、ということの意味である。これらの回路の一つを形成している意識が、なしくずしに別の回路に移ることはできない。いま探査する層とは別な層に知覚をつなぐためには、その回路を一から作り直さねばならないのである（250/114）。そして、知覚にもっとも近いところから、それを含む記憶内容の文脈を少しずつ拡張する、ということは、意識がそれだけ膨張することを必要とする。こうして、より広範な記憶内容を参加させる回路が作られるとき、より精細かつ広範な、知覚の外的条件、つまり身体外部の環境が探られるのである（250/115）。

しかし、より膨張した意識が、より拡張した外界認識を与えるには、意識が心的なものうちで閉じてはおらず、身体的・物理的な運動と某かの関係にあるのでなくてはならない。ところで、意識が膨張したり縮んだりするのは、「生きる上での基本的必要」によってである（305/185）。つまり、まずは環境のうちを生きる者として、認知の主体は理解されている。

三 表象の足場の外在化と言語

『物質と記憶』第二章において、脳は神経組織全体の文脈のうちで、さらに、神経線維を物理現象全般の只中へと配置する文脈のうちで捉えられる。このとき、脳は入ってきた作用を待機させて打ち返す中継点、「中央電話局」（180/26）という意味で「中枢」でしかない。このような脳を中枢として、作用のルートとしての神経線維は複数集まり、身体のうちで神経系を形作り、競合している。この競合が、続く反作用を複数化するため、どの反作用が選ばれるかという「問題」が生ずる。生ずる「問題」は、反作用可能な外界の諸点に対応する。だからこそ、現れる姿はまさに、この反作用が及ぶ先の外界の諸点そのものである。こうして現われる外界が知覚であるとベルクソンは言う（194/43）。また、知覚が生じるのは、危ないものや使えるものを選び取ろうとする「選択 (choix)」あるいは「弁別 (discernement)」があるからだとも言える。ベルクソンは、最も原初的な意味での「意識」とはこうした選択・弁別に他ならないとする（188/35）。

この意識に、二元論におけるような「心」が外界と隔絶して「内的」だ、という意味で内的なところはない。『物質と記憶』のこの文脈での「意識」は、少なくとも何かを避けた

り求めたりする程度には「心」であるかもしれない。とすれば、ここに言う「心」は、その内容である知覚を、身体の外に持つときえ言える。知覚とは、「身体の反作用が及ぶ」諸点そのものだということに着目しよう。ベルクソンのこの考え方は、近年の考え方としては、「行動的(ないし積極的)外在主義(active externalism)」と共鳴するのではないだろうか。行動的外在主義の立場では、認知とは受動的な情報収集ではなく、環境に対して働きかける「認識的行為(epistemic action)」である。認知される環境の特徴は、この「認識的行為」と一体になって一つの系をなす(「カップリングしたシステム(coupled system)」。この考え方からすれば、外的環境についての信念が異なるときには、「認識的行為」が異なるのでなくてはならない。

両者の近さは、単に表面的なものではなく、議論の構成にも似たところがあると思われる。行動的外在主義は、言語的な構造を認知の基礎的構造とはせず、言語を、「認識的行為」と相關する形で環境のうちに構造化された、全く道具的でオプショナルなものと考えるのであり、この言語観は、統語論的構造を認知の基礎的構造の地位から外そうとするコネクショニズムと結びついて説得的であろう。『物質と記憶』において、認知の基礎にある連合が、言語のように明示的な形では行われないことについては、これまで見てきたように、

局在化されない記憶内容総体に関する考察のうちで指摘された。また『物質と記憶』は、言語を「表象」の一形態とみなす。つまり、言語の一方の足場については、たった今見たような知覚の外在性に置くのだが、もう一方の足場は、記憶内容総体に置くのである。その上で『物質と記憶』は、言語があるのは心的な表象を補助するためだと論ずる。この道筋をたどろう。

上のような意味での知覚について、理論上想定される極限にすぎないとベルクソンは言う。実際の知覚においては、感覚神経と運動神経が系を形作るおかげで、「情緒(affection)」と呼ばれる、身体の自動的運動の始まりについての感覚が、純粹で極限的な知覚と接続している(278/125-126)。外界の知覚は、神経系の錯綜のせいで切り出された、身体の潜勢的行動の及ぶ先そのものであった。対して情緒は、同じ理由によつて切り出される、活動を始めた身体内部の部位である(205/57-58)。情緒とは具体的には、例えば快苦の感情がそれである。だが快苦に限らず一般に、知覚に伴う身体の反作用への傾向を、情緒として理解できるだろう。情緒をうちに含む実際の知覚は、「初歩的な知性的作業」(260/128)をも予感させると言われる。『物質と記憶』においては、具体的知覚が示す身体運動の始まりが、「運動図式(scheme moteur)」と呼ばれる。個別と一般をつなぐという点で、こ

の図式はカント的な「超越論的図式」を思わせるところがある。ただし『物質と記憶』の図式は、身体の自動的反応の同一性へと、記憶内容総体の多数性を媒介する。こうして準備されるのは概念的な思考であるが、これは当然、実践の思考であり、純粹な思弁的認識ではない。

意識はプラグマティックである。運動図式とは、プラグマティックな意識が捉える運動傾向である。意識があるということはまた、選ばれる自動的な運動についての迷いがあるということであり、迷いがなければなら運動は自動的に遂行されるだけである。運動図式は、「可能な他の運動から当の運動を区別するためにちよどよいだけの、本質的なところを實現」(257/123)する、という特徴のせいで、なすべき運動について、「仮説を暗示する」(247/248/111-112)ことになる。この図式はその意味で、運動がそこに入るべき、「空虚な器」であるとも言われる。この「器」に入り込み、運動遂行への迷いを解消するのは、記憶内容として保存されていた過去の行動である (266/135)。

運動図式は意識の内容であり、知覚の一種である。意識が、膨張して記憶内容を探査し、収縮して記憶内容を知覚へ近づけることができる、という連合のあり方を思い出しておこう。この点に関して、知覚の「現在」に置かれているように見える運動図式が、じつは一種の記憶なのだということ踏まえ

ておく必要がある¹⁾。つまり、知覚の現在は数学的な一瞬ではない。『私の現在』と私の呼ぶ心理的狀態は、直接的な過去の知覚であると同時に、直接的な未来の限定でもあるのでなければならぬ」(280/153)。そして、この意味での現在の意識は、収縮の極にある意識でもある (306/185-186)。一種の記憶である、という意識の本性のせいで、意識は記憶へ向けて膨張できる。また、現在のうちに運動傾向をはらむ、という意識の本性のせいで、記憶内容は運動へと展開できる。

以上が表象一般の基礎的構造である。多の統一という表象らしい特徴が強調される「概念 (Idee generate)」の場合にも、事情はほぼ同じである。概念に関わる運動図式は「目立つ質あるいは類似についての錯然とした感情 (sentiment confus)」(298/176)であるが、この感情は運動図式であり、意識である。意識が目覚め、概念という心の表象を発動させないなら、概念はむしろ「自動的に演じられる」(300/179)。他方、「自然発生的に抽象される類似に、記憶力は区別を接木する」(300/179)、「つまり外延としての「意味」は、意識の膨張と収縮により、記憶内容からもたらされる。

ベルクソンは運動図式を、「様々な状況における態度の同一性についてのわれわれの意識」(301/179)であり、これは「思考の領域へと再び登ってきた習慣」(301/179)だと言う。概念的思考は、運動図式をそのままの形で使おうとせず、一

種の強調を加える。「この働き〔運動図式——筆者補足〕そのものについて、反省を成し遂げることにより、われわれは類の概念へと移行するのである」(301/179)。言い換えよう。身体運動の習慣の遂行の遮断から、第一の意味での意識(運動図式)は生ずる。そしてこの意識は、思考の領域における、一種の習慣である。この習慣 \parallel 意識がすぐに運動へと解消しない場合には、この習慣 \parallel 意識についての反省的な意識が生ずることがありうる。この第二の意識が、概念を用いた思考(知性)の開始を告げるのである。

運動図式という足場しかない概念は「不安定で消えやすい表象を形成する」(301/180)。というのは、身体の運動メカニズムそのものと違って、運動図式は完全な反復ではなく、それ自体が途上のものである。さらに言えば、運動図式についての意識にすぎない概念の頼りなさと比べれば、記憶内容の総体の方は、ただ個別的多数を与えにやってくるだけである。それゆえ、記憶内容のほうがむしろ、「安定したイメージを構成する」(301/179-180)のである。概念は、運動と記憶の双方から牽引されて解消しかねない。

そこで、知覚を身体の運動メカニズムが支えるように、知性を支えるべく、言語能力という運動メカニズム、本物の運動習慣が新たに作られる。J・トーが解説するように、恐らくベルクソンにとって言語は、概念の形成にとってではな

く、定着にとって不可欠なのである。「(前略)知性も自然の働きを真似て、人為的な運動メカニズムを作り、無制限に多数の個別的対象へと、有限数のこうしたメカニズムを対応させるようにした。こうしたメカニズムの総体が分節言語能力である」(301/179)。つまり、言語とは、新たな習慣という意味での、既成の身体の拡張である。したがって、表象が運動へと自然に向かつてゆくと同じ推進力により、概念は「たえず、結晶して発話された語になろうとする」(302/180)という傾向を持つのである。

言語に固有の運動メカニズムに障害があれば、言語に固有の運動図式も生じず、結果として状況に必要な語が発話されないことになる。それが固有名詞に始まって、より一般性の高い品詞へ、という順序で言葉の失われる組織的な失語症である。「言語の機能が私たちから消えようとしている」このとき、語を捉えさせてくれるのは「身体の努力」である。ベルクソンは言う(265/134)。つまり非言語的な運動図式は、言語の土台にあって、いつでも発動できるよう待機するとベルクソンは解釈しているのである。このように「物質と記憶」においては、広い意味での認知活動が、言語によって全て肩代わりされてしまうことはない。言語は、「単語という並列されるものによって展開するので、本質的に不連続であり、間を空けて思考の運動の主要な段階に目印をつける

(Jalomer) へとしかできなご」(269/139)。言語の役割は従って、「わたしに時折、道筋を指し示す標識 (scriteaux)」(269/139) に過ぎないのである。

四 結び—心の広がりと物質

以上に見たところ『物質と記憶』において、一方で心の働きは、行動と認知が不可分なほど外在化されているが、他方で記憶内容の総体は、物理的世界のどこにも存在しないように思われる。とすると、身体にストックされた習慣や、新たに作り出した習慣的なデヴァイス、また応用できる周辺環境の自動的な反応ではなく、ことさら「記憶内容の総体」だけが、わたしたちの生のために果たす役割は何だとベルクソンは言うのか。この問題は、『物質と記憶』が、認知一般の向かって行くところ、あるいは意識、ひいては「心」の存在理由を、どう説明しようとするか、ということと関わる。これについて二つの角度から見ておきたい。

第一に、神経系が複雑であるからこそ、行動が多様化し、迷いを解消するための意識が現われる、というのが『物質と記憶』第一章の説く、意識の存在理由であった。とすれば、意識とはすでに意志であり、神経系の複雑さによって可能になった自由のしるしである。そこで、すでに意識の「回路」

について確認したように、記憶内容は、より深く意識によって包括されればその分だけ、外界の仕組みをいっそう広く探査することを可能にする。この限りで、記憶内容は、意識の伴う行動の拡張、つまり自由の拡張を補佐するという役割を持つはずである (354-356/249-251)。

第二に、物質そのものを理解する上で、記憶内容を不可欠とする『物質と記憶』の認知理論にはひとつの一貫性を見出せる。

先に見たように、意識は感覚運動に必要な持続の幅を備える。『物質と記憶』の見るところ、この持続の幅を超えて、意識は「物質の持続」に合致することはできない。概念的思考は認知の一形態であるから、感性的知覚を離れた推論によってもやはり、物質そのものへの合致は無理である。何か意識的に認知される、ということは、意識の持続がそこへ適用されてしまう、ということだからだ (341/236)。この不可能を告げる『物質と記憶』の認知についての理論が、他方ではアナロジーを可能にする³³。注目すべきは、現在の意識が記憶内容のそれなりの多数性を収縮している、ということである。収縮される記憶内容はわたしたち人間にとって、どんなに詳細でも、たかだか知覚に合致してしまうだけの詳細さしか持たない。そこで、より強い膨張の力を持つ意識を備えた存在を仮定する。このような膨張の力を持つ者は、より詳

細な記憶の深みへと達することができる分だけ、記憶と現在の間に回路を形成するときには、知覚の彼方にある物質を、恐らく、わたしたちの現在よりも微細な持続のうちに展開する現在として捉えるのではないか(342-344/233-235)。この物質そのものは、人間に備わる神経系の錯綜を解いていった果ての、非常に短いスパンで展開する自動的な反復であるはずだ。この反復を記憶とみなすならば、物質は、自由を失って必然性に近づくほど、限りなく後退した意識、とどうふうにか捉えることができる(356/250-251)。

記憶内容の深みと、物質の広がり、類比可能の関係を結ぶこの『物質と記憶』の理論を、ヘルクソンが物理学とどう対比するのかについては、やはり気になるところではないだろうか。この点についての一連のヘルクソンの論考を見てゆくためには、本稿が敢えて論じなかった等質空間について、また記憶内容の「無意識」が意味することについて目を向ける必要があるだろう。本稿では、この検討のための枠組みとなるものを模索したつもりである。いずれにせよ、当初の目的を果たしたと思われるので、この本稿を終えることとした。

凡例

1 ヘルクソンの著作は *Œuvres*, PUF, 1959, と同時に *Quadrige*

版におけるページ番号も記した。丸括弧内の数字のうち、/の前の前者のページ数、後が後者のページ数である。

2 ヘルクソンの講義集は *Bergson, Cours II*, PUF, 1992 を用いた。ページ数はCIIの略号を用いて示した。

【注】

- (1) cf. A. Clark and D. Chalmers, "The Extended mind" in *Philosophy of mind, classical and contemporary readings*, Oxford University Press, 2002, pp. 643-653. また以下も参照。梁谷國英「拡張する心—環境内—存在としての認知活動」『シリーズ心の哲学II—ロケット篇』勁草書房、2004年、175-222頁。
- (2) この点、ヴォルムスに於て「意識の諸平面」を『物質と記憶』の核心部分に捉える解釈は非常に示唆的だった。cf. F. Worms, "La théorie bergsonnienne des plans de conscience, Genèse, structure et signification de *Matière et mémoire*" in *Bergson et les neurosciences, Actes du Colloque international de neuro-philosophie*, Institut Synthelabo pour le progrès de la connaissance, Le Plessis Robinson, 1997, pp. 85-108
- (3) P. Gallis, "En quoi Bergson peut-il, aujourd'hui, intéresser le neurologue" in *Bergson et les neurosciences, Actes du Colloque international de neuro-philosophie*, Institut Synthelabo pour le progrès de la connaissance, Le Plessis Robinson, 1997, pp. 12-13
- (4) J. Delacour, "*Matière et mémoire*, à la lumière des neurosciences contemporaines" in *Bergson et les neurosciences, Actes du Colloque international de neuro-philosophie*, Institut Synthelabo pour le

- progrès de la connaissance, Le Plessis Robinson, 1997, pp. 24-25
- (5) 戸田山和久「心14 (3)と15」『ニュータータの心』、『シリーズ心の哲学Ⅱ』:ロハット篇』勁草書房、2004年、40-54頁。
- (6) F. Worms, *Op. cit.*, p. 88.
- (7) F. Worms, *Op. cit.*, p. 95
- (8) 現代では、脳の断層画像により、知覚と心的表象は共通の脳器質的な基礎を持ち、深刻な断絶が両者の間になじること、また表象的な記憶が、記憶喪失の事例を裏つける形で、一定の脳構造を活動させていることが分かっているという。このことは、複線的で分散的な神経ネットワークのもとでこそ、よりよく説明されるだろう。cf. J. Delacour, *Op. cit.*, p. 25
- (9) A. Clark and D. Chalmers, *Op. cit.*, pp. 644-646. 染谷「前掲書」211-212頁。
- (10) 戸田山「前掲書」66-68頁、染谷「前掲書」196-203頁。A. Clark and D. Chalmers, *Op. cit.*, p. 650.
- (11) 意識がそれ自体として記憶であるからこそ、知覚と記憶の媒介となりうる、という点について、ヴォルムスの提示は明晰だ。F. Worms, *Op. cit.*, pp. 98-99.
- (12) J. Theau, *La critique bergsonienne du concept*, PUF, 1968, pp. 322-324.
- (13) F. Worms, *Op. cit.*, p. 104.

(ナガノ・タクヤ 熊本電波工業高等専門学校)